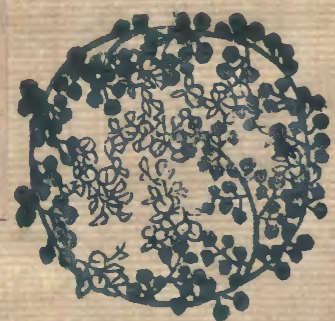
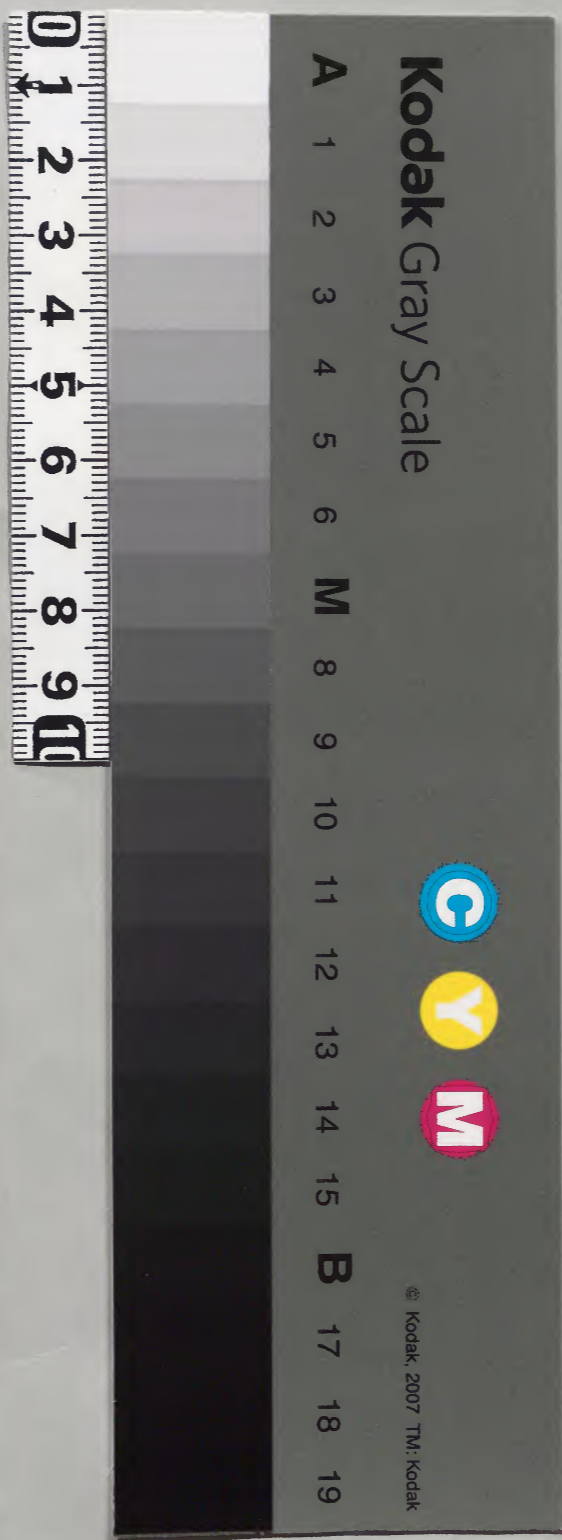


菟島傳信

自光緒十七年正月十八



内閣文庫		庫文閣内			
番號	和 27304	三函	二七三〇		和
冊數	14 (9)	三架	五四		書
函號	203 6		冊號類		



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



花鳥餘情第十七

並八藤袴

藤袴

真木柱

明治十二年購求



以詞并神卷名從古々藤袴はらんの花とあり漢冊七
あり九月事あり又豈乃並也

里守ありと此高約

後八月の事あり相違あり事也

是よりしむつゝの君の心なり

ふりかふむんるれ事とあり 法乃法なりあり

かゝらむ事とありはらうせん也見むるれあり

利と見らば也

りしてある事とありのさうはむらるるのれはあり



是と云うれば君と源氏のついでに縁の地や人のお
とくも事也

うき世に御文の法をいへば 之縁のたまはれ給ふ事
玉らうの君の法をいへば 文おつりめてらひおつるやと
後事ハ法華の巻かみなり

宰相申將おが 一文の法をいへば 文おつるやと
ゆゆくおつる法をいへば 夕霧の宰相おつる法をいへば
ゆらふりゆらみゆらゆら外祖母の服をいへば
程服を衣袂文平縮成爲角文とて用る也 服者の巻
縁を衣に冠つるゆらゆらゆらゆら

はしめ物おつるやとゆらゆらゆらゆら

是ハ夕霧も玉らうの法をいへば 文おつるやと
利おつるやとゆらゆらゆらゆら 夕霧のこゝろハ我お
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
為侍の法入内的事也

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

おとこは人 是れは内におくものしる事と傳ふ夕言
乃こゝるも中しりあり

いしむいこおさうふ物ふしあある

儀禮之婦人有之從之義之專用之道故未嫁從父既從
夫死從子故父有子天也夫者妻之主也今棄女子幼時父
母とてうわたりし中もとてふおしげおんこ後生きん一の
最の法んらもうあんと後のはいそとあう一内夜の法こ
うらこもも屋じ事るまおまをれう比とる物法もえその
しら乃人しおまのりていて後ま

是は傳ふらうらこめ法あひ入こあまあふおちえまう
れおとらうらこ物めう一法事いせまおちえまに我ふ
法らつちあははくこせまじ一法と内におくものしる事
事お給事と夕言の法もあう也

おとこは人 是れは内におくものしる事と傳ふ夕言

申の籠也歎とい申おのこまおい善おたのめおちのこまお
いおのこま也又人乃目おあわまおらうらうらうらこ
あゝおたり

いしむいこおさうふ物ふしあある

傳ふ夕言の法もあう也

申の籠也歎とい申おのこまおい善おたのめおちのこまお

なほ

月こははらけんあこいおあう一 九月にひらけお
月あこ夜うらこまおあう

西文集

夏あうし夏もあうこおあう月乃らうらうらこあ
今あはらうこおあうああ

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

いもせよあつたは海に君とていふ橋かきほひらり
うは本のあつらひとせうとてあつてはとて
ほよひあつらひとて

入る所迄は後白河院御事の御事也

内侍の御事也

少少の御事也

御事也

御事也

御事也

御事也

御事也

御事也

御事也

御事也

御事也

御事也

御事也

西文云尚侍新任之後諸總殿陣令奏慶賀云由
諸司陣 西文云

内侍人お来傳奏
青司大相副 女官事 給禄 女官一就家入 教給者

中宮御内者付内侍令所慶賀云有賜物 今案内侍乃云

御事也

御事也

御事也

御事也

御事也

御事也

御事也

大將殿のたけう君　むすも思の大將の嫡子母がたけうのまの所
女よ十一ありあるとていふらんちとつる也

いふも思も女房かたけうは清んを産りてそ
ちうも思もいふもつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る

たけうのんあつてつゝは清んを産りてつゝの事やをうめうちをみへんを産る
おつゝの殿舎也つゝの事やをうめうちをみへんを産る
乃事なまは清んを産るつゝの事やをうめうちをみへんを産る

清んを産るつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る

つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る

つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る

つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る

つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る

つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る
つは事もつゝの事やをうめうちをみへんを産る

の穢ははるかに梅のうらを後(うら)とて肉(うら)たふまは
あつはるかにあり

花鳥餘情第十八 梅枝 藤裏系
十八梅枝

心詞内卷名梅うきハ催馬樂とうらうま也深哉九氣也
正二月乃事又しり
たはひのたのまおかしくうら 何ら暇君はのき十二氣也
うはか乃あそ文の事と思ふしり

春文もあつし二月は清ううらの事あつたれ

春文は朱雀院の白子今今年十三氣也清元娘母と白梅と
あつしりあきし又冷泉院乃二月の例と横摸せり

ころしりあやうと物事とハ 故院の娘又高麗人今来胡とる
事あつたあやうと物事とハ 二條院の娘と

あつたあやうと物事とハ 二條院の娘と

その心は物語の心かきかき

したまふ人の心さうさく水くはなれり

獲麟の一句とあまのこころのあまのこころ

いみじくも感のこころと涙のこころ

やうかきめ絶妙の筆舞のこころ

とりのこころ

この法うとのたふ集集あまのこころ

万葉集初巻平城天皇詔約信撰く見真の序又万葉物語

一況に貫く撰く況和意中人抄也同巻抄も撰ぬい外儀

法撰に巻目六中不見但うのこころ撰字の抄もこころ

おのこころらいうこころ

近新のみくも古今和歌集と 近新の法代も撰せし後方歌

集のこころはら唐集のこころ

たのこころらいうこころはらうて 切打甚むおらなる也

おのこころらいうこころらうて

源氏の巻のうきうこころ 結集也

うきうきあまのこころはらうて

あまのこころの源氏の巻のうきうと教訓 信のこころ

この源氏の巻のこころはらうて

信のこころの巻のこころはらうて

あまのこころはらうて

あまのこころはらうて

源氏の巻のこころ

あまのこころはらうて

ら積り交みあはしむる人なればこそ思ひつゝ一
乃にしるすはあはれ也

女もしほりしはあはれも思ひつゝ思ひつゝ

是にこそ舟の鷹乃はまはれも思ひつゝ

ねのしるすはあはれも思ひつゝ思ひつゝ

のしるすはあはれも思ひつゝ

しらわらわらしむるも思ひつゝ思ひつゝ

わらわらしむるも思ひつゝ思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

あはれしるすはあはれも思ひつゝ

十九藤原集

以詞力奏若源氏世九家乃二月より十月までの事みより梅
う枝乃同年也

清いそあ乃不しゆと宰相申將をあらんからよん

清いそあ乃不しゆと明后君の東交しりいし藤原也宰相はあ

うらなるといふ言ののりたまし思き川あつらひり

女君もかゝるふと免給しりふらんと

左大臣申務文部より少少ふり清女さしりせしめし給

あは也

かの交ぬと居りし思ふらりて給あい申務の交りは事出露の

よりうをひきたりぬと思きりて給といひり

二月廿日大殿大交の清元日ふくこしくらむはまうて這り奉記

兼平二年二月廿七日皇太后極楽を為先考左大臣及先姑王女

追福法會と今案極楽の昭宣と建三と立深草

は記の清いそあ乃不しゆと宰相申將をあらんからよん

二條乃大交の事也

たこの清いそあ乃不しゆと宰相申將をあらんからよん

清いそあ乃不しゆと宰相申將をあらんからよん

出後より少少の清いそあ乃不しゆと宰相申將をあらんからよん

な記しあそあ乃不しゆと宰相申將をあらんからよん

清いそあ乃不しゆと宰相申將をあらんからよん

西原乃交夏はりつる記に二藍次より記花田はあさ花田なり花春

清いそあ乃不しゆと宰相申將をあらんからよん

あは也

後てらぬけうもはうううまの物あひの陰しりけり此のむの字也
以前とけ詞あり也其のむらある事しうううううううううう
やと此とけうりそ後まうううううううううううううううう
るる也其後とけり此の奇の詞ありううううううううううう
ろけのけ家とけううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううううううう
ても海もううううううううううううううううううううう
はううううううううううううううううううううううう
海海のせな指もの舟はしうううううううううううううう
くううううううううううううううううううううううう
うの指遺乃い海一舟乃美はつるもいけうううううううう
あううううううううううううううううううううううう
病もふきうううううううううううううううううううう
将のりうありぬる記刻も一定せる事也事ありて用あり

事也

いたきぬうううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううううう
舟が將のりうありぬる記刻も一定せる事也事ありて用あり

ううううううううううううううううううううううう
あうううううううううううううううううううううう
女にふくうううううううううううううううううううう
あうううううううううううううううううううううう
あうううううううううううううううううううううう

あうううううううううううううううううううううう
あうううううううううううううううううううううう
あうううううううううううううううううううううう

より事一とありて

のりらるることたぬ河と河とありて

弘に或るを以て長符應給考諸奥國外教位之十三事擬

郡日廿八人自河菊多刺守六十人自余畧刺直國府外教

寺如伴省直兼知依伴給考

延暦十八年十二月九日

今案男の海并の河と河とありて

人たあるありて河と河とありて

とありて

あつた那とありて

と後とありて

福とありて

六指并に花たる人

はあつた那とありて

とありて

は間とありて

てとありて

後達とありて

はあつた那とありて

とありて

とありて

とありて

とありて

とありて

後より八日自さるる也

うちをさるる也

ゆき

なやめ給ふ

乃あつぬ

たさう

うさ

宰相

やの

ゆめ

くん

安於清涼殿始新灌佛事

ぬさ

あ

あ

あ

い

あ

あ

あ

明名

あ

あ

あ

おりの河海よりこの函服乃事内宴命と別よめられりこ

おめいけい 流とぬま也いらんやあ源抄おの流とぬまゆり也

み 流物とぬまのふのふこひつ 小樂世あり

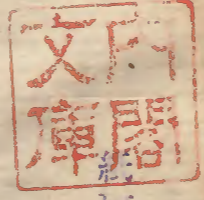
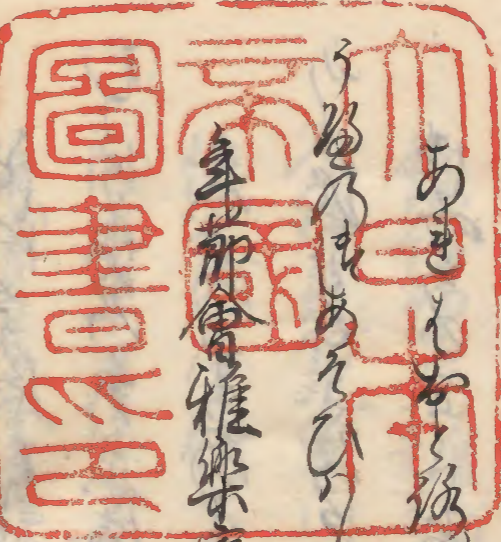
樂世あり

樂派の用意は及ぬま也それと大報正教とあり礼聲あり

あまもかた

うるむあえい

事部會雅樂寮之樂後百和琴



33

枚

